
異世界の竜騎士物語

夏野

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界の竜騎士物語

【Nコード】

N7597M

【作者名】

夏野

【あらすじ】

ごく普通の小学生男子市川円ある日何の前触れもなく見たことのない森の中に居た…。何が原因なのか、足りない頭をひねる少年。しかし彼の周囲の状況は否応もなく、異なる世界の変革の渦へと彼を押し流す。再び日本の土を彼は踏むことができるのか。

第一夜 当惑の世界レイスファイア（前書き）

本作品は基本的にハッピーエンド至上主義です。本作品は微ラブコメ、微エッチ成分を含みます。食べられません。主人公は年上の女の子から好かれやすいですが、執筆者の願望はかけらも入ってません。…入ってませんでば。

最後に、楽しんでくれると執筆者は浮かれます。

第一夜 当惑の世界レイスファイア

「え〜と…とりあえずここどこよ？」

パジャマに素足の少年は眠たげな顔で呆然とつぶやく。目の前には見渡す限りの森が広がっていた。自分で口に出した言葉に遅れてじわじわと実感する。深夜までついついオンラインゲームにいそしんだ後、ベッドに飛び込んで 気づいたら枕を持って森の中にいたのである。思いつきり頬をつねってひとしきり悶絶して眠気は冷めた。今の状況を現実であることを認識した瞬間、一気に外気の冷たさに気づいて身震いする。

『夜で真冬並みの寒さと来た ついてないねえ……』

見渡す限り明かりは見えない。「人里離れた森の奥ってか？ ますますついてない。」

ぼやいてハードボイルドに決めてはみたものの、朝が来る前に
兵庫県在住の六甲第一小学校5年生市川円君が まどか 山中で凍死
体で発見されました なあんで報道されてしまいかねない。

いやだッ……間抜けすぎるぞっ、パジャマに枕持って山中で
生き倒れとか…

神よっなぜ僕はこんなとこに

……ん？ 神様？ ばちがあたったのかっ

もしかして。

一昨年夏休みに神社の御神木を蹴ってカブトムシ集めたのが
いけなかったのか

小三のチビどもをカツアゲしてた中学生に爆竹投げつけて成

敗したことが

ロケット花火水平発射事件のことかっ……

なんかもう余罪まで含めたらすげえダメな子みたいじやん、僕。

結局、神様から肯定も否定も言葉は返ってこないの、いったん考えないことにする。落ち込むより先に、暖をとる場所を見つけないとリアルに野垂れ死ぬので、民家もしくは洞窟を探そうとするが、見渡す限りの闇。素足という悪条件も加味して、移動できる範囲の中に本当に安全地帯があるのか絶望的に感じる。

さてよ。朝まで運動してりや死なないかも？体動かすとあつたまるし。朝になれば視界も開けるだろうしな。

45分後木にもたれかかって汗だくの馬鹿が一匹出来上がつっていた。

『円は 小学校の授業時間フルが 活動限界と判明した。』

レベルアップとかじゃねーから。ぐったりしながらゲーム脳の自分に1人突っ込みを入れる。本当に死んじゃうかも知んない。地面に寝転がってぽつんとそんな事を思う。満月が二つ、煌々と雲間から出始めていた。

本当にどうなんだよ？

第一夜 当惑の世界レイスフィア（後書き）

90年代のファンタジーアニメ（ラブコメあり）が大好きで大好きで仕方ありません。（神秘の世界エルハザード
天地無用！ セイバーマリオネットJ e t c）

私が当時感じた魂の高揚を少しでも人に分けてみたくなったんです。少しでも楽しいって思ってくれたら幸いです。

第二夜 疾走の世界レイスファイア（前書き）

一話で言い忘れてましたが（書き忘れですね…すみません）、円が飛ばされた世界はレイスファイアって呼ばれております。言うこと言っ
たし

さて、第二夜の帳を開こうか？

第二夜 疾走の世界レイスファイア

リーシャ side>

「追えっ！！逃がすな」

「森に入ったぞ」

ソグド皇国第38皇女リーシャ・ユル・ソグディアは必死に走っていた。なんとあれば隣国

カステイル帝国軍の襲撃を受け、乗っていた馬車は大破、従者は全員殺されたのだ。

帝都スイルベーンで開かれていた三国会議開催中の夜会の最終夜の最中に勃発したクーデターの混乱の中、リーシャは素早く自国の宿舎にたどりつき、馬車で皇国を目指した、ところが、だ。素早く帝都を制圧し、各国の重鎮を人質に取った反乱軍のリーダーはソグドからの賓客が脱出したのを察知し、軍を動かしたのである。

捕まったらどうなってしまうのか恐ろしくて気が遠くなりそうになる。風に加護を足に付加しているが、4時間も走り詰めなのだ。体が先に参ってしまいそうだが、ここで捕まるわけにはいかない。

父、ソグド皇ムジカ・エル・ソグディアには血族への情など一切ない。父ならば、むしろただの負債が外交カードの一枚に大化けしたと舌舐めずりをするかもしれない。心が挫けてしまいそうになりながらも、父親の権力欲の玩具になることへの反発がリーシャの足に鞭を打っていた。

「いや…もういやいやいやああ」

頭を振りながら叫びながらその長いドレスに躓きかけてそれでも彼女はひた走る。この 黒い森 はカステイルとの国境だ。ここを抜けさえすれば希望がある。だんだん近くに聞こえる甲冑の触

れ合う音と足音に怯えながら彼女は走っていた。

「止まれえええええ」

甲冑を着た騎士の1人が叫びながらリーシャの肩へ手を伸ばした。リーシャは必死で前に飛び出した。

マドカside>

「…うるさいな」

段々と夜が白んできたころ、円は眼を開けた。結局眠くなったり寒くなったら動いて、温まったら座って休憩を繰り返していた円だったが途中から立ったまま意識を失い、木にもたれかかって寝ていたのだった。どうやら凍死はしていないようだが、金属音や枝葉をかき分ける音が聞こえて目が覚めたのだろう。

「x*‘‘ @!!!!!!」

男の興奮して荒げた声が聞こえた。少し遅れて円の目の前の茂みから、女性が飛び出してきた。褐色の肌に、走っているときにつけたのであろう枝葉のまとわりつく銀髪をたなびかせた背の高い女性だ。

一瞬間と女性は見つめあう形になった。綺麗な人だなという感想を寝不足の脳みそにぼんやりと浮かべたまま 正面衝突した。膝が顔面に入りまひた。いひゃい。鼻を押さえつつふらふら立ち上がると、そこには心配そうに顔を覗き込む美人な加害者さんと、不穏な空気で自分たちを取り囲む甲冑のおじさま方。

「

」

血走つた眼で剣を振り上げてなんかよくわかんない言葉でしゃべっている。金髪で青目な時点で日本人じゃないし、そもそもこのご時世に甲冑に剣とは随分とレトロ趣味ではある。

追われていた女性は僕をかばつて甲冑野郎と僕の間立ち、男たちを睨みつけた。無関係そうな僕なんか置いて逃げればいいものを。少しは自分を優先しようよ。呆れながら男たちを観察する。手ぶらの女性一人に六人とは卑怯が過ぎないかい。僕は手元の目覚まし時計を振りかざしてベルを鳴らし、枕とともに思いつきり先頭のコスプレさんに投げつけて女性の手を取って走り出した。

「おとといきやがれっ」

中指を立て舌を突き出して挑発のおまけつきだ。

第二夜 疾走の世界レイスファイア（後書き）

…前書きでかつこつけて気付いたことがあります。

あのね、物語の中では一夜開けてないんだ（アハハハ
気にしないで行こう）。

第三夜 邂逅の世界レイスファイア（前書き）

一話一話の分量バラバラですすいません。

第三夜 邂逅の世界レイスファイア

リーシャ side>

見知らぬ少女の足はすごく速かった。リーシャの二回りは小さいその少女は、彼女の顔面飛び膝蹴りをもろに受けながらもすぐに立ち上がって、枕と騒音をたてる見知らぬ器械を兵士に投げつけ、彼女の手を引いて走り出したのだ。少女がカスティール軍の兵士に向けてはなった言葉は彼女の知らない言葉だった。飛ぶような速度で森を抜けてしまった少女とリーシャはしばらく息を整えていたが、先に少女から話しかけてきた。

「
」

苦笑しながらリーシャは少女の耳に風の加護を掛けた。少女は精霊の加護を見て驚いたようにわたわたとしている。動きが山リスのようで愛らしい。

「私の言葉がわかる？」

またまた驚いたようで今度は自分の耳たぶを引っ張っている。あわてたように頷いている。勢いよく何度も首を振るものだから細い首がもげないか心配になってしまう。

「あなたの耳に風の加護を掛けたの。言葉の壁を取り払ってくれけど、あなたの言葉は私にはわからないままなの。この指輪を填めて。そうすればあなたの言葉が私にわかりますし、私の言葉もあなたに通じますから」

そつと安心させるように微笑みながら少女の小さい掌を握って指輪を親指にはめてやる。リーシャ用の指輪は少女の指には大きかったようだ。不思議そうに指輪を見つめながら、

「えと、通じてますか」

鈴のような透明感のある声で問いかけてきた。上目遣いでおずおずと指輪に向かって話している。

可愛すぎるっ

おっといけない。

「ええ。別に指輪に向けて話さなくても大丈夫よ。っと、まずはお礼とお詫びを申し上げなくてはいけませんね。助けてくれてありがとうございます。ありがとうございました。それから、膝蹴りは他意はなかったんですよ？ほんとににごめんなさい。あとで手当てしますね。私はリーシャ・ユル・ソグディアと申します」

「市川円：です。あの別に大したことじゃないから気にしないでください。怪我もないです」

一気に言って少女は俯いてしまう。つややかな黒髪は前と横は長く後ろをうなじ辺りまで刈ってあり、細い首が見える。伏し目がちな瞳は漆黒で睫毛は細く長い。薄く土埃のついた寝巻の様なものを纏って素足だ。ほんの八、九歳に見える。

「イチカワマドカ？珍しい名前ね？」小首をかしげながら問うリーシャ。

「あ！えと姓がイチカワでマドカが名前なんだ・・・です」

両手を目の前でぶんぶん振りながら目の前の少女　マドカが答える。

「無理にかしこまらなくてもいいのよ、マドカ。私のこともリーシャって呼んで。あなたこの近くの子ではないでしょう？どこから来たの？」

口ごもって遠い眼をするマドカ。聞いてはいけないことを聞いてしまったのかしら……。

「信じられないかもしれないけど……自分の部屋で寝て目が覚めたら寝たときの恰好のままあそこにいたんだ」

「それで月が二つもあるのを見たから、ここは元のこと違う世界なのかなって思っただけ」

「こ・・・言葉も通じなかったでしょう？髪の毛の色とか眼の色とか肌の色全然違うし。」

お姉さんの耳僕と形違うし とマド力はおそろおそろ付け加えた。

「落ち着いてマド力。ここはレイスフィアと呼ばれている世界で、私たちは今ソグドという国にいるの」

少し額に眉を寄せて難しそうな顔になるマド力。ほんつとくにコロコロと表情は変わるし、感情の読みやすい小動物のようだ。近くにこんな可愛い生き物なんていなかったなあ。

「じゃあリーシャ…さんて」

「リーシャ」

「リーシャさ」

「リーシャ」

ちよつと照れているマド力が見たくてつい彼女の唇を人差し指でふさぐ。

「リーシャは偉い人なの？苗字にソグディアって入ってるし」

意外と観察力とか注意力は高いようだ。

「父親が田舎貴族ってだけよ。それよりあなた、客人 まれびとなの？」

「まれびとってなあに？」

きょとした顔で問い返すマド力。かわいい…かわいすぎる。

「異世界からこちらに来る人がたまにいるの。その人たちのことをめつたに訪れない客人だからまれびとっていうのよ」

「僕以外にもあつちから来た人っているんだ？」

ええ、と相槌をうちながらあらためてリーシャはマド力を眺める。
(妹にしたいくらいかわいいな)

マド力side>

ひとまずは意志疎通できたことに安心する。コミュニケーションは円滑な人間関係に必須だね！とかみしめる。少しぼんやりとこちらを見つめているリーシャを見ながら
(とりあえずこのことは教えてもらえそうだなー)と円は計算していた。

リーシャ side>

くしゅんっ

「マドカ？ 顔色良くないけどあなた大丈夫なの？ 一晩中そんな恰好で外にいたんでしょう？ ちょっと破けてるけど被っておきなさいな」
自分の羽織っていた外套を目の前の少女にかぶせる。短めの上着なのに背丈の差でほとんどワンピースになった。

「リーシャのおいがするう」

襟元をつまんで首をすくめて外套に包まる仕草が愛らしい。

「と、とりあえず私のうちは近くだから、そこで今後のことを考えましょう。マドカも私も休まないといけないしね。」

リーシャの家は冗談のように広がった。

第三夜 邂逅の世界レイスファイア（後書き）

やっと家にヒロインが帰りました。

マドカが普段着るまでどれくらいかかるだろう。

あ、リーシャはマドカを女の子と誤解してます。そういつの好きでして…すいませ（ry

第四夜 再会の世界レイスファイア

屋敷の呼び鈴を叩いてリーシャは一步下がった。

途端に赤毛の小柄な人影が勢いよく飛び出す。メイドさんでした。

……もう驚かないよ…セバスチャン（執事）が出てきても。

マド力が変な感心をしているそばでメイドさんはリーシャに飛びついた。

「おかえりなさいませ、姫様。ご無事で何よりです…っほんとに…本当に…ほ…つく」

「ごめんね。心配掛けて…でも無事よ。大丈夫だからね、もう大丈夫よ、ライカ」

「もう…どこにお出になる時も私をお連れください。姫様の御留守の間、生きた心地がしませんでしたっ…ほんとうですよ？」

背の高いリーシャと小柄なライカは仲睦まじい姉妹のように再会を喜び合う。

しばらくしてリーシャはマド力の方を振り返り、あの子が命の恩人よとライカに囁いた。

ようやくリーシャが1人でないことに気付いたライカは寝巻の少女を見つめる。

寝巻の少女も負けじと見返す。

じーーーーーーーーーーーーーーーーーっ

じーーーーーーーーーーーーーーーーーっ

じーっ

かくん。

突如前触れもなしに、寝巻の少女はパタリと倒れた。

「マドカっ！！どうしたの、マドカっ！返事してっ…何処か怪我してるの？」

「うわわわ大丈夫？？」

二人の少女のあわてる様を尻目にマドカは徹夜の疲れで倒れたのだった。

すーっすーっ……

（寝てるだけみたいね。たぶん一晩中走って疲れたんでしょう。ライカ、人呼んで運んであげて。
起こさないようにね）

（姫様：悪い子じゃなさそうですけど…この子の素性は確かなんですか？）

（…それはちよつとここじゃ話せないの、後で話すわ）

マドカside>

気づくと知らない天井。どれくらい倒れていたんだろうか。

「う…ここはど…気付いたかあああああああああああああああ
あ少年んんんんん」

オールバックの紳士が吠えていた。

思わず飛び上がったマドカは壁際まで猛スピードで後ずさった。

「そんなに怯えることもなからう。姫様の命の恩人ということだしな。気合いを入れてもてなさねばならぬのだッ」

同じ速度で並行してマドカに詰め寄る。

「そつだ！申し遅れたが驚はセバスチャン！！当家の執事長であるッ！宜しく頼むぞマドカ殿っ」

あわててマド力はがくがくと首を振る。

…嘘言つてすいませんセバスチャンにめっちゃビビりました

「丸一日寝ておったのだ。何か作らせよう。好きなものがあつたら遠慮なく申しつけてくれいっ」

執事ってこういう口調でいいのかな…。マド力は呆然としつつそんな事を思う。執事長に催促されるままに好物を思い浮かべていると、賑やかな足音が聞こえてきた。

「まったく、姫様は直すよう申し上げても一向にお転婆が治らぬ。嘆かわしいっ」

鼻息荒く嘆く執事長、軍人のが向いてんじゃねえのと思う。

「ハイ執事長はどいたどいたー マド力に似合いそうな服持つてきたの！寝巻でうろうろってのはよくないしね。私の子供のころの服で悪いんだけど」

「ひ、ひめさま……」

リーシャとメイドさんが部屋になだれ込んできた。めいどさん、たしかライカつて名前だっけ？150cmもないんじゃないかあるまいか。年上なのに年下に見えるってのは何とも不思議な人だ。

「いきなり倒れちゃったから焦ったけど、過労だつて。丸一日寝てたしもう平気？」

小首をかしげるリーシャ。改めてみると美人だなおい。アラビアの御姫様みたいな恰好をしている。ゆったりしたすそを絞ったパンツに細身のエスニックな柄シャツ、シヨール…かな。

「うん…あ、はい。平気です、でもお腹がすいちゃって」

「かしこまらないで！あなたは私の命の恩人なのよ？自分の家だと思つてくつろいで」

そう言われても使用人さんの心象つてもものがあるでしょうに…。

「分かった・・・」

仕事に戻ろうとする執事長とライカさんを呼びとめる。

「あの、申し遅れました。いちかわまどか市川円といいます。執事長とライカさんにはいきなりお手数をお掛けしました。すみません」

二人は一瞬驚いたように見えたが、礼には及ばないと微笑って言うてくれた。

リーシャ side>

寝室から執事長を武力排除した後、お腹を鳴らしながら抵抗するマドカに二人の淑女が忍び寄る。

「えと…自分でできますっ！着替えるからみないでっ…そ、そこはダメですって、ちょ、あ…」

必死に自分の体を隠そうとするマドカ。

なんだか変な気分になってきたわ。

「姫様…私ちよつと楽しくなってきました」

「へ？」

「ライカ！奇遇ね、私もなの」

「え・・・」

「マドカ様？痛くないですよ、怖くないですよ、きれいに」「なりましようね」

キャ――

ッ

その日何度となく、リーシャ邸では絹を裂くような少女の悲鳴があがったという。

第四夜 再会の世界レイスフィア（後書き）

脱衣の世界のほうタイトル詐欺じゃなかった気がしてきた・・・
感動の再会だったはずなのに・・・アルエ

ですがようやく主人公が外着を着ます！

第五夜 胎動の世界レイスフィア（前書き）

分かりやすい構図です。展開もみえみえです。・・・だが王道が好きな作者にスキはなかった（キリッ

調子こいてすいません。感想で視点変更ないほうが好みという感想をいただきました。ありがとうございます。今回からなしにします。第四夜までは、また後ほどに再編集します。

第五夜 胎動の世界レイスファイア

ソグド皇国皇都ザナルカンドは皇居の一室に二人の男がいた。

一方の男、ソグド皇ムジカ・エル・ソグディアは苦々しく問者の報告を聞いた。

「死ななんだか・・・つまらん！帝国へのカードの一つにでもならねば、リーシャなどただの負債に過ぎぬというに」

影のように姿かたちが判然としないもうひとりの男は膝をつきながら口をまた開いた。

「皇王様・・・そのご判断は早計かも知れませぬぞ」

「ほう？使えそうな駒でもあったか？」

「リーシャ様の御生還の件ですが、黒い森で黒髪の少女が手を貸したそうです。カステイルの追手によると、知らない言葉を話したとか。客人の可能性が^{まれびと}高いと思われます」

にたり、と皇王は晒う。

「それは面白い・・・ひどくおもしろいなああ」

皇王はクツクツと晒う。久しい感情、享樂に酔っていた。

「リーシャのばかつ！ライカのおほっ！」

マドカは腕で身体をかばいながら、潤んだ瞳でこちらを睨んでくる。

「ごめんごめん。つい可愛くてね・・・反応が。でも男の娘だったのかぁ・・・びっくりしたわ」

「ニュアンスに不穏当さを感じるんだけど・・・」

ぶすつとした表情でも少じょ・・・少年は愛らしさを失わない。

（ああもうかわいいなあ）

「分かってない・・・絶対反省してない（ブツブツ）」

「マドカ様・・・申し訳ありません・・・」ライカは眉を八の字にしながら謝る。

「・・・きれーなお姉さんにひんむかれるってのはなかなかできる経験じゃないけどさ・・・意識しちゃうじゃんか」

ぼそつとつぶやく。

「ん？」

「なんでもないっ！！」

「きれいって言うてくれるのはうれしいな」

「き……きこえてるんじゃないかあ!」

「で・・・追われてた理由とか、そこらへんだけだね？」

リーシャが何でもなかったように話を変える。

「では私からお話しします・・・」赤毛の小柄なメイドは語り始める。

「正直に言いますが、マドカ様の立場はかなり難しいものです．．．まればとは自治領を持つ代わりとして帝国と皇国に干渉しないことになっているのです。たとえ、こちらにいらした直後とはいえ、ソグドの皇女を救出されたのですから」

レイスフィアにおいて客人は数からいってそう珍しいものではない。しかし、異世界の技術を持ち込んだ彼らは1人の指導者の下自治領を獲得し、帝国にも皇国にとつても脅威になつていた。今のレイスフィアは東の帝国、西の皇国、南の自治領が覇を競う三国時代といえる。その中で、客人が皇国に味方したとなれば、その波紋はすぐにレイスフィア全土を揺るがすことになるだろう。

[illegible]

「・・・うんまあ一応ね。といつても皇位継承権が38番目だから、まあまず回ってこないわ。」

ライカがたしなめるようにリーシャを窺う。
首をすくめながらリーシャはマドカにいう。

「気にしないでね。ライカ以外の友達が初めてできてうれしかったの・・・」

「う・・・。別にいまさら態度変えないし、リーシャいなきゃ野垂れ死んでたよきつと。
迷惑掛けたくないんだ。ここにいてもいいのか聞きたかっただけでこのままだとずるずると厚意に甘えちゃいそうだから」

少しそっぽを向いてマドカはぼそりと言う。

「まあ田舎貴族の気楽さと皇族特権があるからね、大概のことはなんとかなるよ。
それより、ご家族も心配されてるだろうし早く還る手段見つけないと」

「でもさ、聞いた感じだとこっちに来てあつちに還ったヤツなんていないんでしょ？」

「あきらめちゃだめだよ。きっと大丈夫って精霊達も言ってるよ？」

「せ・・・いれい？そついや初めて会った時にも風の加護とか言ってたけど・・・」

「わたしみたいにエルフの血が混じっていると精霊魔法が使えるの。まあ私はクォーターだから、風の精霊さんとだけ契約できたのだけどね」

なんちゅーファンタジーだおい。まあ耳が細長くて尖ってるし、ビジュアル的には納得なんだけど。風の精霊さんだから異世界人のマドカと意思疎通できたんだ〜よかった〜と能天気になうりーシヤを見てると、常識とかを捨てなきゃどうしようもないと分かった。

・・・それ以前に異世界だしな。

第五夜 胎動の世界レイスフィア（後書き）

ここからちよつとマドカには辛い異世界の現実ってやつに直面することになります。

第六夜 別離の世界レイスファイア（前書き）

今回は少し前五話と雰囲気を変えました。序章の終わりにふさわしい語りになってしていると嬉しいですね。第5夜で言ってた試練はこれからになります。第7夜以降をお待ちください。
それでは第六夜の帳を開きましょう

第六夜 別離の世界レイスファイア

早朝、皇国の辺境イスファーンはリーシャ邸の一室。

「執事長！その話は本当なの？」リーシャが顔色を変えた。

「こんなことでええ嘘をお申し上げて私めえに益などありえませぬう」

執事長の顔色もすぐれない。

先日帝都スイルベーンからの生還劇についての報告を皇都ザナルカンド側が要求してきたのだ。それだけならばマド力のことをばかすこともできたのだが、協力者の素性までも要求に入っており、逃げ場はなかった。

「・・・そう・・・ですね」

父がここまで早く動いてくるとは予想できなかった。

いや予見できたはずなのに。マド力と過ごす時間が自分の危機意識を麻痺させていたのかもしれない。一週間に満たないとはいえ、初めての対等な友人だったのだ。憩いの時間が思いのほか自分の心を解きほぐしてくれたのかもしれない。

「姫様・・・」

ライカも不安げにリーシャを窺う。肩を震わせてうつむく長身の美姫の表情は見えない。きっと理不尽さに涙を浮かべているのだろう

「ひめさ・・・」

「くくく・・・あーっはははははははははははあああああ」

幽鬼のような表情でクツクツと晒う皇女。

（い・・・いつものひめさまじゃないっ！？誰かどうにかしてー）

「絶対に手放さないわ。私の初めての友達なのよ？一つぐらい私の本当に望むものが手に入ってもいいでしょう？ねえ？ライカ。そうは思わなくて？」

がつしりと両肩をつかまれ揺さぶられる赤毛メイド。

「ひゃいそうおもいみゃふえええええ」

（うそっ！？外れないっ！姫様こんなに力もちさんでしたっけええええええええええ）

「父上・・・いえ、皇王ムジカ・エル・ソグディア・・・覚悟しなさい。もともとあなた気に食わなかったのよ」

使用人たちは、皇女殿下の怒気に呼応するかのように騒ぐ風の精霊に慄いたという。

「いいよ。証言すればいいんでしょう？都見物できるの？」

「ええ。ですけど・・・お気を付けくださいね・・・ソグド皇は野

心的なお方ですから」

こんなことが皇王陛下のお耳に入ったら私は打ち首ですけどねーと
気弱に笑うライカさん。

「それに、姫様のご機嫌も芳しくないんです・・・」

「確かにねー。横暴な親御さんだよね・・・どうも話を聞く限りじ
や、帝都の祝賀パーティにリーシャを行かせた件だって、安否を気
遣った節がないものね。そりゃ荒れるよ」

そう言つてうんうんと頷くマドカ様。ああああもうっ違いますよ
。姫様は御父上があなたを政治の道具にしようとしたことで逆鱗
を・・・本当の逆鱗を逆立ててしまったのですから

「大丈夫だよ ライカさん。リーシャのこと好きだからさ、守
りきつて見せる」

自分のこともね？と不敵に笑う少年。そう、悪戯っ子のようにあど
けなく大胆に。だけれどそこには言い知れぬ威圧感があった。

リーシャってね、向こうに居る たった一人の家族に、叔母さ
んに似てるんだ。外見じゃなくて雰囲気だね・・・。初めて会った
時、この世界に突然来て訳わかんなくて、頭からっぽでさあ、でも
リーシャがいたから間違えずに済んだんだ。

だから、どんなことがあっても離れないし守つて見せるよ
そう言つて拳を前に出す。

「ライカさんも拳をつくつて前に出して そう」

そして、少年は突き出した右の拳を赤毛の小柄なメイドの右拳に軽くぶつける。

「仲間内での約束の印なんだ。こうして誓ったことは絶対守る決まりなんだ。」

だから嘘偽りなく守るよと少年は言う。

「・・・分かりました。お嬢様を、リーシャ様をマド力様・・・いえマド力殿にお任せします。それから・・・言うまでもありませんが、御一緒にお戻りになってくださいね」

凛々しいライカさんってきれいで格好いいよと円は微笑う。

いつもきれいで格好いいでしょう、と澄まして胸を張るライカは、やっぱりいつもの背が低い子犬のようなライカで。
二人はこらえきれずに噴き出す。

不安を蹴飛ばすように

「皇都にはこのコ達で行くのよー」

出立の日、厩かと思っていた場所にはつぶらなお目のサラブレッドさん達は居らず、翼竜達ワイバーンが佇んでいた。見知らぬマドカに興味を惹かれたのか、どうやら繋がれていないワイバーン達はマドカを取り囲む。

るおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおんツッ！

ぐるあああつ！

ぎやるううつつ！！！！！！

マドカを見定めるように視線を外さず6メートルほどの体躯で威圧するワイバーン達。

マドカは物おじせず見返す。もともと指輪物語やパーンの竜騎士シリーズにはまるなど、小学生にしてはディープにファンタジーの世界に漬かっていた。ファンタジーが目の前で息づいているのだ。目をそらす理由がない。熱のこもった眼でワイバーン達を見つめ返す。自然と口が開いた。

「リーシャ様に拾われた異界の民草です。本来ならあなた方の背に乗る栄誉など持ち合わせぬ身ですが、奇縁も縁の内と申します。今日は皇都までの道中宜しくお願い致します」

いと小さき人の子よ！！その小気味よいあいさつ気にいったっ！
リーシャ様のことは宜しく頼むぞ！少年よ！

お主には不思議な品格を感じる・・・道中のことは引き受けよう！
！皇都は魔窟。ゆめゆめ油断めさるなよッ

頭蓋に直接、言葉が響く。マドカは美しく力強い意思が自分に満ちるのを感じる。

「この子たちは話さないけれど、丁寧なあいさつだと思っわ。ありがとう、マドカ」

翼竜たちは茶目っ気たっぷりにウインクをした。

内緒ってことね、分かったよ

「いきなり意気投合したの？すごいわね。普通は私の言うことしかほとんど聞かないのよー？このコ達」ライカなんて蛇に睨まれた蛙のようになっちゃうんだから、というリーシャ。

「あんまりヒトには好かれなんだけどねー」

二人は談笑しながら、乗騎服を纏う。フライトジャケットに似た上着に耳垂れ付き帽子に風防ゴーグル、カーゴパンツ、革のブーツ。屋敷の前の広い草原に屋敷中の使用人たちが並ぶ。ライカと、執事長の姿もある。

「行つてきます」

「姫様を宜しく願います」

「・・・御無事で」

翼竜の羽ばたきで気流が生まれ、緑のざわめく中、主従は一旦の別離の挨拶を交わす。

護衛二人を引き連れて四騎のワイバーンは飛び立った。
目指すは皇都ザナルカンド、権謀術数の魔都。

第六夜 別離の世界レイスフィア（後書き）

メイドさんはメインヒロインじゃありませんし、マドカとメイドさんのフラグではないんです、ええ。二人はリーシャ大好き同盟の同志といった仲になっていきます。ハーレムフラグを期待した方！残念ながらマドカを軸にする気はないです。ごめんね。

あと、遅ればせながら、お気に入り登録が二件ですと！！ありがとうございます。感想も励みになりました。これからもモリモリ書きます。宜しくお願いします（ぺこり

第七夜 激動の世界レイスファイア（前書き）

一章の始まりです。勢力はいっぱいいるとどうしても文章量が増え
ていくなあ。

第七夜 激動の世界レイスファイア

「そうですか・・・それで、カードは今どこに？」

「いまは皇都へ高速移動中とのことです・・・おそらく熱源と速度からワイバーンかと思われます」

自治領の首脳陣は仄暗い室内で密談を交わす。

部屋の中には三人の男がいた。

眼鏡を掛けた白衣の長身痩躯の男。

小太りの三つ揃いのスーツの男。

中肉中背の灰色の背広の男。

この三人が自治領の最高権力者だった。

問いの答えを得て満足そうに頷いた中肉中背の男は朗々と語り始める。

「不可侵条約は我々の技術力があちら（皇国と帝国）の数の脅威を振り払えるからこそ、実効性があるのです。今、侵攻事由を渡したとしてかし、この自治領は揺るぎません。それよりも、この事態は我々に明らかに利するものですよ。永い間、三竦みだったこのレイスファイアの天秤が、ここにきてようやく軋みを見せ始めました。その鍵が 客人、我々の懐かしき地球の人間だということですから

これほど愉快なこともありますまい つふうつくくく

くはっ あはははははははあ

ひとしきり晒うと、歪んだ笑みを更に歪ませて、血走った眼で叫ぶ。
「愉しもうではありませんか・・・力を蓄え、雌伏を続けた日々に別れをつ、旧時代的な野蛮な異世界人どもにこのレイスファイアを牛耳らせる時代は、もう終わりです！！そう・・・まさに旧時代の終

「わりを、レイスフィアの幼年期を我々が終わらせるのですよつ！！！！科学の灯でっ」

残り二人の男達は追従するかのように愉快そうに、心底嬉しそうに
 啗い始めた。

暗い会議室に三重の高笑いは不気味に響いた。

うっひょおおお！きもっちええええええええええええええええ！！

ワイバーンを駆るマドカー一行。

不思議なことに一行の中で一番翼竜を上手く扱えているのは、一番経験の浅いマド力だった。

マドカ殿には恐怖心の欠片もないな……

呆れたような思念波がマドカにのみ届く。

マドカの乗っている翼竜はイシュトヴァンという名前らしい。ここ数時間でイシュトと呼ぶほどに仲が良くなっていた。

しかしエルフって動物とか幻獣とか妖精とか精霊とかと意思疎通できなくてイメージだけだ・・・。

リーシャはイシュトたちの<声>が聴こえない。

リーシャ殿は・・・今精霊たちの声もあまり聴こえなくなっているのだよ・・・

ほかの三頭も首肯の思念をマドカに送る。

ココロの安寧がなければ我々の声は正しく届かないのだ

(やっぱ、ソグド皇・・・お父さんだろうね)

・・・それだけとは限らぬがな

「不思議な御子ですね。騎竜と長年通じ合っている歴戦の竜騎士のようだ」

「真に」

「そうね・・・時々ひどく頼りになる表情とか雰囲気醸すのよ・・・ずるい子だわ」

後半は小声で護衛たちには聞き取れない。

皇都ザナルカンドへは騎竜を飛ばして丸三日といった距離だ。

そろそろ、日も陰る頃合いである。一行は高度と速度を落とした。

真下に広がる森林地帯へと着陸する予定だった。

ドンッ

つんざくような轟音とともに多少先行していたマドカとイシュトヴアンを砲撃が直撃した。

「マドカッ」

「なっ」

「いったい何処からっ」

四方に砲手の影も姿も見えない。

それ以前に、リーシャは弾丸ではなく赤黒い光線なぞを発する兵器はレイスフィアに存在すると聞いたこともなかった。精霊王と契約していた古のエルフならいざ知らず、ワイバーン種を一撃で墜とすなど現代の魔法遣いには不可能だ。少なくともリーシャにその術はない。

（どうなってるのっどうしてマド力がっどうすればいいの　精霊さん達、マド力を助けてっ）

いつもは見える精霊達が見えない。いつも聞こえる鈴の音の様な声も聞こえない。

奇跡が起きない。

みるみる白煙と赤い血しぶきを噴きながら翼竜は地面へと墮ちていく。

ここでなんとかしないと、二人が死ぬっ
出てよっ

ここで使えなきゃ何のための魔法なの
ハーフェルフである意味がないじゃない

焦るほどに精霊の気配を見失う。護衛達は我を失った主人を諫めるのを諦め、ワイバーンを駆って三頭の高度を下げさせた。

「姫殿下！！御氣を確かに」

「落ち着かなければ、マド力様を御救いすることすらかないませぬぞ！！！！」

「分かってるっ！！だけど、だけどマド力がっ　死んじやうっ」

護衛の1人はリーシャの背後に飛び移ると、手刀でリーシャの意識を刈り取った。

「無礼を承知でっ！今は非常事態故、御容赦を」

そのままリーシャの騎竜を駆つて森の中に着陸する。もう一人の護衛は残りの翼竜とともに続いた。

グ
ア
ア
ア
ア
ア
ア
ア
ア
ア

「おいっ！！イシュトッ！！大丈夫か！！気をしっかり持てっ」

マドカ！！ツグツ・・・主も味わってみてから言うのだな！

「ひ……人が心配してやってるのになんちゅー憎まれ口をッ」

いずれにしる森の中に着陸しても……この状況だと墜落か……

しかし一介の小学生で、なんの特殊な技能を持ち合わせたわけでもなく、この状況で何かできることって 　ん？ 特殊技能？

今、この瞬間、僕は動物と軽快なコミュニケーションを交わしてないか？それにリーシャにもらった指輪。

「つ、一か八かだ、風の精霊！！今この場にいるなら僕に
 応えろ！！奇跡を起こして見せろおおおおおおおお
 おおおおおおおおおおおおおおおおおおお」

しんつ。

(デスヨネー)

「やっぱりダメかあああああああつあああああああ！！！！」

叫ぶな！！傷に触るうううううううううう

緑の森へと一人と一頭は吸い込まれていった。

第七夜 激動の世界レイスフィア（後書き）

主人公は今のところワイバーンと会話できる以外に能力は持ち合わせておりません。タイトルの意味が通じるまであともう少しなので、カッコイイ主人公のターンを乞うご期待！！

そうそう！お気に入り登録が三件に増えました！！

まだ少ない話数でこんなに気に入っていただけて感謝しております。御感想、御意見も励みにさせていただいております。

これからも宜しく願います。

第八夜 契約の世界レイスファイア

リーシャは護衛を振り切って駆けずり回った。しかし指輪の魔力をたどろうにも、精霊を感知できない今の自分にはどうすることもできないと分かっていた。

護衛たちはワイバーン同士の念話を頼りに探したが、イシュトの気配を三頭が察知できない様子を見て今日の搜索を断念するよう進言した。

どうして応えてくれないの

私何かしたのかなあ

精霊さん

マドカのことを守って

お願い

自治領の統治府

「ワイバーンのみ撃墜との報告がありました！カードはいまだ健在」

「そうですか・・・しかしあの高さから落ちて無事はありませんでしょうしね。アシを潰しましたからね・・・徒歩である森を子供が独力で越えられるはずはないです」

眼鏡の男は葉巻に火をつけながら満足そうに嗤う。背もたれに沈みながらくつくつと。

「一応手は打っておきましょう・・・クーデタでうち漏らした三八番目の皇女殿下もまとめてね」

「生きてるかあ？」

なんとかな。マドカの方こそ怪我はないのか？

「不思議とね。あんだけのオーバーテクノロジーなら、イシュトもろとも原子レベルまで分解されたっておかしくないはずんだけど」
そうか・・・もう見えぬが、主を守ったのだな我は・・・

イシュトが危ない。荷物も燃えてしまったし

どうすればいい。

どうすればこの大きな友人を救える？

くっそっ！結局役立たずなのかよっ

人里なんてないだろうし、リーシャ達と合流しなくては。

死んでしまう。

だから。

イシュトを背負い引きずる。

火事場の馬鹿力というやつだろうか。

少しづつだが6mの巨体を小学五年生が引きずっていく。

熱気を感じ、とくにジャケットは脱ぎ捨てている。

意識が朦朧とし始めながらも、ワイバーンを放すことなくマドカは足を踏み出し・・・倒れた。

ダメだ

歩けない

《その意気やよし　我が倦族を救おうとその小さき身でよくぞ我が元へたどりついた》

だ・・・れ

《くくく・・・人の子よ。名を尋ねるならば自分の名を先に名乗るものだ》

いちか・・・わまど・・・か・・・

《汝、契約を望むか》

え？

欲しい。

力が欲しい

手に、
入るなら

契約を望もう

《&#”@がイチカワマドカと契約を結ぶ我とともに在れ》

黒い奔流がマドカのナカにあふれる。

「うが ああああああああ ああ ああああああああ ああああああ
あああああ」

熱が鈍痛が激痛が、ありとあらゆる苦痛が体中を駆け巡る。

永遠に思えたその一瞬が過ぎ去ったあと、マドカはたくさんのく声>を聴き、たくさんのく存在>を視るようになっていた。

す、とマドカは手を伸ばす。

指先から出た黒い塊がイシュトを包む。

次の瞬間イシュトの傷は癒えていた。

マド・・・力？

「イシュト・・・苦勞掛けたね・・・ほんとに　でももう大丈夫。リーシャを探しに行こう」

（マドカ・・・別人のような気配だが・・・マドカであるな）

目を瞠るような表情でこちらを窺ってくるイシュトを急かし、真夜中にも関わらず急に夜目がきくようになった瞳を凝らす。驚くこともなく自分のチカラを自覚した。

「誰か知らないけど・・・借りはきっちり返させてもらう」

第八夜 契約の世界レイスファイア（後書き）

今回は少し短め。っていうのも次回の構成を考えてのことです。
ようやく主人公が覚醒します。
ペーシングで行きますぜよ！

第九夜 憤怒の世界レイスファイア（前書き）

スロースターターにもほどがある主人公ですがようやく怒り大爆発の八面六臂を書いて嬉しい作者でした。

第九夜 憤怒の世界レイスファイア

「ッ姫様」

しばらく自棄になっていたりーシャを看ながら護衛たちは周囲を警戒していた。

「警戒の網を破られたようです・・・ざっと三十騎はいます」

「・・・そう。どうやらそいつらがあの砲撃の犯人ね」

機械人形がリーシャの眩きを合図にしたかのように姿を現した。

オート・マタ

機械人形 機械仕掛けの殺戮兵器で、魔術回路と自治領の誇る現代科学の融合で生まれた自律型のゴーレムともいわれる。稼働限界

は命令術式の達成を基準とする画期的なシステム。時間拘束を取り払うことで大幅なコストダウンにつながったといえる。数で劣る自治領の武力の一つといえる。魔法を無力化する装甲を持ち、物理攻撃も中世レベルの兵器では通らない。

状況はリーシャ達にとって、絶望的と言えた。

打開策の見つからないまま、オート・マタ達の包囲が狭まっていく。

ソグド皇国第三十八皇女リーシャ・ユル・ソグディア確認

命令履行開始

ドンッ

赤黒い光線はリーシャと護衛たちの間を抜けて森を破壊した。

「はずした？」

『馬鹿を言わないで下さいよ・・・くくく・・・少し狩りのお楽し

みを味あわせてもらっただけです』

「!?!」

「・・・自治領ね、こいつらを操ってるのは さっきのもあなたたちでしょう?」

『 御明察、御明察。まあそれくらい誰でもわかりますよねえ・
・くくく』

「こんなことをしでかしてっ貴様らああああ!! 均衡を崩す気が!
! 欲得に惚けた愚か者が
ツガア」

啖呵にかぶせるように、肩を機械人形が撃ち抜く。

「アルフッ」

「つく」

『ははははははははあ!! あなたがた野蛮人に負けるわけがない
でしょう? この長きにわたる均衡は我々自治領が許してやった仮初の
主権ですよ? 思いあがるのもいい加減にしていたきたいですね
え!! 下等動物どもがっ』

バスッ

ッドン

かすめるように穿たれる光線をリーシャ達は避け続ける。風の精霊
はいまだにリーシャに力を貸そうとはしない。

ドオオオオン

ギァアウオオオオン
ンンンンンンンンンンンンンンンンンンンンンンンン

ンンンンンンンン！！！

一頭の翼竜についに魔光が突き刺さる。

苦悶の叫びをあげてワイバーンは倒れ伏した。

『おやおや、もう終わりですか。もっと楽しめると思ったので』

黙れ、蛆虫が

思念の塊がその場でハウリングする。オート・マタモリーシャ達も全員が動きを止めた。

イシュトを駆るマド力の姿があつた。

「随分好き勝手してくれたようだね
と思うと吐き気がするよ人形どもが」

これが僕の同胞の所業

マド力の周囲を黒い気体とも液体ともつかぬモノが満たしていく。
その闇の広がりと共に異常なほどの圧力が周囲に叩きつけられる。
プレッシャー

魔王の様な威圧。

霸王の様な気迫。

闇はオートマタを包み隠し、圧壊させる。

「　　ツチツ！魔力回路＜パス＞が切れてる、逆探知できないようにしたな。さすがにそこまで馬鹿じゃないか・・・」

舌打ちすると、先ほどまでの威圧を嘘のようにかき消してリーシャ達に駆け寄る。

「リーシャ。怪我不い？大丈夫？平気？」

「え　　ええ。それよりあなたたちは平気なの！？直撃だったじゃない」

「この通りだよ　　でも、よかった・・・。リーシャが無事で・・・ほん・・・と・・・よかった、うああああ」

ぼろぼろと泣き出すマドカ。

リーシャに駆け寄りながら躓いて女の子座りになりながら。

泣き疲れてブレーカーが落ちるようにパタリと意識を失う。

「　　本当にあなたって子は・・・どうしてこんな」

膝枕をしながらマドカの頬を伝う涙を拭う。

「でもさっきの力・・・この数時間でマドカに何があったというの
」

第九夜 憤怒の世界レイスファイア（後書き）

名前が片方出てきた護衛さんアルフさんと翼竜の一頭は手当てを受けていません。放置プレイです。

あと、主人公がチートのように映るかもしれませんが能力についてはおいおい明らかになります。

主人公がようやくヒーローっぽくなりました。ここまで長かった（ふう

第十夜 交錯の世界レイスファイア（前書き）

今回は割と会話多めです

第十夜 交錯の世界レイスファイア

「とりあえずここから移動するけど・・・空路だと地表からまた狙い撃ちにされかねないわ」

「幌馬車を借りましょう、姫様。ワイバーン達は言伝に帰すのです。我々とこれ以上同行すると逆に目印になってしまつ」

「私も同意見です。それに無傷とはいえ、マドカ殿も相当な無茶をなさつた御様子だ・・・。せめて腰を落착けさせて差し上げなくては」

「そうね・・・」

三人はリーシャの膝の上で安堵した顔で眠る少年を慈しむように見つめた。マドカの先ほどの異能はなんだつたのか。そんなことがどうでもよくなるような、それほど邪気のない寝顔だった。

リーシャ邸の厨房

「お嬢様大丈夫でしょうか・・・」

「我ら使用人のできることなぞ、無事を祈るうのみよおお」

だからたつぷりいい礼拝堂で祈つて来おいいいと絶叫した執事

長は、本日20枚目の皿を割った赤毛メイドをたたき出した。

主がいなくてもこの体たらく　情けないなあと、俯きながらライカは本館の庭を歩く。

「え　？あれって、お嬢様たちが乗っていたワイバーン？」

四頭のワイバーンが誰も載せずに、リーシャ邸へと向かってくるのが見えた。

化物

化け物

ばけもの

バケモノ

貴様など

お前など

あんたなんて

死んでしまえばいい

「う　あ」

マドカは小刻みな振動で頭を壁にぶつけて目を覚ました。

「目が覚めたのね。体は平気？」

「り・・・しゃ？」

「それ以外の誰に見えるの？」

クスリと悪戯っぽく笑うと、リーシャは御者席の護衛二人に振りかえった。

「お寝坊さんがようやく起きたみたい。あとどのくらいかしら？」

「それはよかった！ちょうど皇都の外郭門が見えてきたところです。マドカ殿はまだ観ておられないのでしょうか？一見の価値はありますよ」

護衛の、先日負傷した方、アルフさんが屈託なく笑いかけくる。馬車に乗り換えたんだ、と呟いてマドカはリーシャの傍らに座り、御者席の先へと視線を向ける。

地平線の上に白い壁が屹立していた。近づくにつれて、一点の穢れも曇りもない真白な壁に人物や馬、動物のレリーフがくつきりと彫られているのが見えてくる。

「新しいの？あの壁？」

「か・・・壁って・・・まあ外郭も兼ねてるから間違いないですがね。それよりなんでそう思うんです？」

「だって全然古びてないし傷んでないじゃない」

「ああ、あれは古の技術で作られていますので。建国30年記念に作られたものですから、かれこれ1200年前からあすこにああして聳えているんです。もうエルフ族くらいしかレイスフィアでは再現できる種族はいないんじゃないでしょうか」

「せんにひゃ・・・って。平安時代以前からってこと！？
桁違いなオーパーツだ。」

びつくりするマドカにリーシャは言う。

「まあ、二週間滞在するけど観光はできないって思っておいてね。
父と・・・皇王との対談をはじめとして、手続きみたいなものとか
社交界の面通ししとくこととかね。つまらないことだけどこれが結構、手間と時間がかかったものなのよ」

「さいですか・・・。」

皇族宿舎の個室に辿り着いたリーシャとマドカは安楽椅子に腰かける。

侍女たちの淹れた香草茶をひとしきり味わってようやく人心地がつ

いた。
ふう、とため息をついてハーフェルフの皇女は異界の少年に話しかける。

「ねえ。落ち着いたら聞こうって思ってたんだけど・・・」

椅子のクッションに埋められたマドカの背が小さく跳ね上がる。

「な・・・何？」

「・・・あのとき、あなたが私たちを救ってくれた時あなたは明らかにあなたじゃなかった。離れている間に何が起きたの？」

「ッ」

あの時、機械人形オート・マタを駆逐した時、明らかに自分は人間を辞めていた・・・。

もつと根本的なところを言えば、力に・・・全能感に酔っていた。

昨日の悪夢の通りになってしまっているのではないだろうか。

力に溺れてしまっているのではないか。

僕はその時、リーシャを壊してしまいかもしれない。嫌われてしまいかもしれない。

そんなのは・・・イヤだっ

「ごめん・・・僕にもよくわからないんだ」

だから嘘をついた。

自分を守るために嘘をついた。

リーシャは・・・何か言おうと口を開きかけて、閉じた。
マドカにはそれがありがたく思えた。

第十一夜 幕間の世界レイスフィア（前書き）

幕間なのでけっこう短めです。なんとというか第十夜と第十一夜は自分としてはかなり難産でした。

第十一夜 幕間の世界レイスファイア

宿舎の夜。

リーシャは明日以降に控えた父皇との対峙を思い、闘志を奮い立たせていた。

絶対にマドカは渡さない。

政治の道具になんて、まして戦争の道具になんてさせない。
初めての友達だから、命の恩人だからこそ、ソグドをレイスファイアを嫌いになつてほしくはない。

いや、違う。私自身を嫌いになつてほしくない。

「寝るっ」明日は戦だ。

第38皇女は執事長が見たら憤死しそうなほどに行儀悪くベッドに飛び込んだ。

マドカは夢の中、白い部屋にいた。まわりは眼に痛い白一色。光源がどこにあるのかも不明だ。

《・・・イチカワマドカ。さっきぶりだな》
最近聞き覚えのある声が反響した。

（ 出たな。あんたどこのどいつなんだ ）

《命の恩人に詮索か？感心せんな》
人の悪そうな笑い声が響く。

（ あんた、たしかあの時契約って言ってたな！どういう意味なんだ。契約ってのは相互に債務を負うってことだ。あんたは僕に力を貸しているのかもしれない。じゃあ僕は何をするんだ？何をさせられるっ）

嫌みを無視するとはなかなか肝っ玉が据わっている、と笑う気配があり、

《頭の回転は本当にその年にしてはよく回る方だの。何、大したことではない。・・・暇つぶしだ》

（ひま・・・つぶしだと）

《我のところまで辿り着くニンゲンなど久方ぶりなのでな。しかも、我が倦族を救うために扉を開いたのだ。興味深い・・・実にな》

（扉・・・？また訳の分かんないことを。それより！あんた名前なんて言うんだ、僕は名乗ったろ）

《ぞんざいな口調だな・・・まあいい。契約の刻はお前にはパスが通っていなかったからな。真名が聞こえんのも無理はない。我は、竜族の王、黒き鱗の竜ザラマンデルだ》

（ザラマンデルってのが名前なのか？）

《まあ、そうだな。ワイバーンども倦族とは違い、神祖の血統を継ぐ貴族ならば名の前に受け継がれてきた血族の呼び名を持つ慣わしなのだ》

（・・・結局僕にさせたいことってないのか）

《特段ないな。お前がこの世界を見聞きし、思っさま行動するがい。もう我が特性たるく夜>はお前に根付いた。どう使うかはお前次第だ》

(僕次第・・・)

《たつぷりとお前が、イチカワマドカがこのレイスフィアで何をなすか見てやるう》

高らかな哄笑を残して人影は去った。

第十一夜 幕間の世界レイスファイア（後書き）

いよいよメインタイトルに偽りなしと胸を張って言えそうです。ふうえ？わけわかんねーよって？大丈夫！張った伏線は全て回収作業しますよ。（た・・・たぶんね
お気に入り登録4件に増えました。ありがとうございます。

第十二夜 夜会の世界レイスファイア（上）（前書き）

間が空いてすいません。え・・・誰も待ってない・・・だと。
期待してもらえるように頑張ります（シクシク

第十二夜 夜会の世界レイスフィア（上）

「きひひひひひひひひひははははは

L

人影は人体としてはありえないほど仰け反って、爬虫類じみた舌を出し晒し続ける。

「童王 退屈と怠惰の王よ！！余程の玩具か？その童がわらしああ」

ひどく愉快そうな調子の声にもかかわらず、その表情は暗く、歪んでいる。

「久しく地上など興味もなかったが、羽虫共がどこまで思いあがつ
ているか見物
しに行くのも一興か」

そう嘯くと人影は眼下に見える雲海へと飛び込んで行つた。

謁見の当日。

外交大使が真つ先に通される玉座の間には大勢の人間が集つていた。吹きぬけの大広間にエスニック調の調度品がしつらえられている。マド力は知る由もなかったが、建物を含め中近東などのイスラム圏の伝統様式に酷似している造りだ。貴族たちの纏っている衣服の意匠もイスラム風だった。

遠巻きの貴族の雰囲気を感じたのか、リーシャは切れ長の両目で回りを抑え込むような視線を叩きこむ。ざわついている貴族たちもこの圧力には屈していた。

「ほう。貴様が厄介事の種か？この忌まわしい厄種め！！さつさと神聖なる皇都から出てゆけ！！」

「雑種がっ」

「皇女殿下といえど38番目ではな・・・たらしこむ相手を間違えたのではないのか？くくく」

後ろから後ろから怨嗟嫉妬罵詈雑言が一塊りになって二人に吹きつける。

横を歩くりーシャは表情も変えず悠然と歩いてるように見える。

だけど、その手は白くなるほど強く握りしめられていて、怒りを押さえこんでいるのがわかる。

憎い親父さんは皇王様、周りも大貴族ばかり、か。さすがに波風立てるのは自重してるのかな。

まあ、一応「渦中の人」だしな、僕らは。

と、1人の優男が進路をふさいだ。

「キミの様な庶民の入っていい場所ではないのだよ？こ・こ・は。分かったなら今すぐ皇女殿下から離れて」

「失せる！優男」

「ソソソソソソソグディア四大貴族に名を連ねるボクをぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶ侮辱したなっ！！」

脳にあるスイッチを意識的に入れる。そんなイメージ。たったそれだけでマドカのプレッシャーは跳ね上がる。有象無象の貴族など物の数ではなかった。

「ひつ　「一瞥しただけで優男はその場に釘づけになった。」

もう振り向かずに少年は、ソグド皇王ムジカ・ユル・ソグディアの下へゆつくりと歩いていく。

「貴様　。魅入られたか？」

ソグドの王はピクリと眉をしかめながら、それでも愉しそうに訊いた。
ぞくりと悪寒を感じるような表情で、しかし声だけは朗らかに少年は応える。

「　違いますよ。向こうが僕に惚れたんだ」

「ほう　その力どう使う？」

「僕は僕の味方にこの力を捧げる　それだけだ」

「ぬかしおってえええ！！雑種があ！皇の御前であるぞ！！控えよ！！」

頭のでっぺんが寂しい側近が叫ぶ。

「　よい。細かいことを申すな。異界の民には我らと違う理がある」

皇は左手を激高した貴族　マドカにすれば中年の脂ぎったおじさんの前にかざし、制した。

「別に今は（・・・）、ソグド皇国に害意はありやしませんよ」

マドカは両肩をすくめる。先ほどからリーシャは青ざめて息遣いがわずかながら乱れているのを感じている。やはり、過日の一件
帝都スイルベーンの反乱は尾を引いているらしい。今日のところは
ここで引きあげた方がいいだろう。謁見自体はすんだとみなしても
いいのだから。

「今は　か」

「ええ今は（・・・）ね」今日のところはこれで失礼します、と踵を返す。

「また訪ねてくるがいい。貴様はいろいろ面白い　イチカワマド
力」

機会があらば　と12の少年は小生意気に応えた。
最後までリーシャはソグド皇と目を合わせることはなかった。

「どうやら皇都に入ったようだね」

太り気味の時代が1人だけ違うような洋装の男が呟く。

「ソグドに渡すには惜しいチカラですしね　今の私たちへの心証

は正直良好とはいえないでしょう。ですが皇都内部でひと悶着起こせばとりあえず勢力の天秤を動かすことはできます」

眼鏡を掛けた細身のスーツに身を固めた男がひどくいやらしい笑みを浮かべる。

「火種は幸いありすぎるほどあるし　　というわけか？」

「そういうことです」

自治領の会議室に陰謀の晒いがこだました。

第十二夜 夜会の世界レイスフィア（上）（後書き）

ここから同タイトルで中、下と続く予定です。

べべべべべべ別にタイトルのネタ切れとかじゃ・・・ないんだからねっ（涙目）

お気に入り登録五件だそうです。ありがとうございますー

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7597m/>

異世界の竜騎士物語

2010年10月13日06時56分発行